Title	上代日本人の意匠について：片手附コップ型土器の例
Author	辻合, 喜代太郎
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 12 巻, p.61-65.
Issue Date	1965-02
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

上代日本人の意匠について

——片手附コップ型土器の例——

辻　合　喜代太郎

Design of the Pre-historic Age in Japan

—Examples of the Cup-type pottery—

By Kiyotaro Tsujiai

I

古代人の日常生活又は特種な祭祀等の為に使用したと思われる土器類に表わされた形態についての意匠的理念の問題に関してここでは資料を主に弥生時代の土器，須恵器，土師器に例を求め，特殊な形態である片手附コップ形土器を対象としてあげ，その使用に際しての造形理念と形態について考察しようとしたものである。

II

遺物（資料）について

第Ⅰ例　弥生式土器（写真，図Ⅰ.A，B，C，D，E）

遺物の出土地は大阪府柏原市船橋遺跡であり*，昭和32年大洪水のため河床の砂土が流失した際に露出したものである。土器は片手附コップ形を示し**，A，B，C，D，E型と区別する5個である。これらの土器は畿内に於ける弥生式土器の編年に於ては第四様式に属している。同形態をもったものは，大和唐古池遺跡からも発掘されているが完全形のものではない***。D，E型の例は何れも台附であることがその特性とし，D型には台に円形の透穴がある。E型は扁平な台を附している****。

第Ⅱ例　須恵器（写真，図Ⅱ）

八尾市山畑の横穴式古墳から副葬品の一として出土したものである。口径と高さは10cm×11.5cmの壷形土器の一種である。比較的に焼成はよく薄手作りに仕上げられ，胴部に数条の篦目が残っている。把手は片手附にしてその形態が華奢な紐状を呈し，実用的目的を表わした把手ではなく，器形との美的関係上から附されたものと考えられる。土器には何等の装飾的文様は施されず，只この把手の存在によってよく器全体の美しさを確保しているものである。

第Ⅲ例　土師器（坩形）（写真，図Ⅲ）

大和国平群出土であり，器形は丸底，極めて薄手仕上げであり，全面黄褐色を呈している。器高8.7cm，口径12.7cm，（完全な円形ではない）厚さ2－3mm，編年的には土師器の後期に属しているものと思われる。把手は器の一側面（器の膨みの部分）に附している。長さ4cm，巾2cm，厚

さ1.4cmであり，土師器に属した釜形土器，皿形土器に附された両手附把手と全く同様であり，その断面は矩形を呈し，先端は稍々丸く尖っている。然かも先端は胴部に附かないで，恰も動物の角の様に突出している。この把手は前例の遺物のものとは全く異った性格をもっているものと思われ，左右何れの手にてこの器を持つ場合も，親指を把手の上にかけ，他の指を器にそえることによって器を自由に操作し得られるものである。第Ⅱ例の場合と異って全く実用的目的に附されたものと思われる。

註*　河内船橋遺跡の調査は「河内船橋遺跡出土遺物の研究，大阪府文化財調査報告第8輯及び第11輯 1958, 1962」がある。

**　「片手附コップ形」という名称は初めて使用したものであり，従来の土器の名称には見当らない。ここでは仮称としておく。

***　「大和唐古弥生式遺跡の研究，京都大学文学部考古学研究報告第16冊，第66図。」

****　弥生式土器を編年上三期—前期，中期，後期—に分類する。この分類の規準は主に器形，文様によっている。前期の土器は文様に於て篦描又は貝殻施文による沈線文様を主とする。中期の土器には凸帯文又は櫛歯による各種の櫛描文様を主とする。後期の土器には櫛描文様及び簡単な図形があり，装飾的手法は単純化されてくる。

須恵器は灰色，黝黒色の色調を呈し焼成の硬いものである。古墳時代の後半頃（紀元5世紀頃）に出現し，朝鮮系の技術に基づいたものであり，古墳の副葬品として通有なものとする。器形も坏，高杯，坩，甕瓶，器台がある。

土師器は弥生式土器の系統に属し，主に古墳時代からそれ以後に製作された。一般的に赤褐色又は黄褐色を呈した素焼である。

Ⅲ

土器の実測値

片手附コップ形土器の形態についてその全高，把手，把手と器との関係等について実測した結果は第1表の通りになる。（単位は cm）

第1表

形　　式	器　高	器ノ巾	同上比	把手ノ底部ヨリノ長サ	胴部ノ長サ	把手ノ長サ	同上ノ比	把手ノ巾	胴ノ厚サ
第1例 A	8.3	15.2	1: 1.831	0.5	9.0	7.2	1.25 : 1	1.2	0.6
〃 B	7.2	13.9	1: 1.791	0.51	8.5	5.5	1.54 : 1	1.2	0.5
〃 C	7.0	14.6	1: 2.085	0.3	9.7	5.0	1.94 : 1	1.2	0.5
〃 D	9.2	10.5	1: 1.410	2.0	9.5	4.4	2.35 : 1	1.0	0.6
E	9.3	12.4	1: 1.333	2.1	9.0	5.0	1.80 : 1	1.0	0.5
第Ⅱ例	10.0	11.5	1: 1.15	1.0	8.5	4.0	2.12 : 1	0.7	0.3
第Ⅲ例	8.7	12.7	1: 1.419	4.0	8.5	4.0	2.15 : 1	2.0	0.3
現在ノコーヒー茶碗	5.6	12.5	1: 2.32	1.0	10.5	5.5	1.909: 1	1.0	0.2

註　現在市販紅茶茶碗三個の平均値。

Ⅳ

装飾文様（図Ⅲ）

第Ⅰ例弥生式土器A，B，C型に施された文様は何れも篦描に基づく平行斜線文である。器形に対

して過剰に失することなく，何れも器形の口縁部に一重又は二重に施している。就中C型の場合はその斜線が比較的肉太に表現されている。A型の場合は線条の巾0.5cm～0.8cm巾の並行線二条である。B型は0.5cmの線条一条が不等隔に自由に施している。C型の場合は線条もやや広く1.0cm二条とし，斜行的に施し，その下方にこれと逆の方向に極めて短かい斜行線の一帯が施されている。

第Ⅱ例の場合の装飾は器面には見られないで，把手が恰も装飾的に工夫されよく器形と調和している。

第Ⅲ例の場合は器面には意識的な装飾文は施されていない。成形に際して櫛にて印された線条が不規則的に見られるにすぎない。

V

考　　察

古代人の生活用具—片手附土器—について調査したが，今これを要約すると，

1. 土器形態（器の高さと横の長さ）
2. 土器の胴部と把手の長さとの関係
3. 土器の装飾文様（装飾的意匠）
4. 形態創作としての基礎的理念

土器形態としての土器の高さと横の長さの比は1：$\sqrt{2}$又は1：$\sqrt{3}$の近似値を示し，安定性に富み，第Ⅱ例（須恵器）を除外して明かに実用的目的をもって創作されたものである。

土器の胴部と把手の長さとの比は1：$\sqrt{3}$又は1：$\sqrt{5}$の近似値を示し，器形の大きさに対して把手の太さ，又把手の附着する部分と器底との関係は意識的に器形の安定と実用的目的以外に更に美的感覚の表現をも意図したものであろう。

装飾文様として，第Ⅰ例のコップ形土器に見られた装飾文様又はその理念は器形よりも更に美的表現を強化しようとしたものではなく，あくまで器形を主体とし，装飾を第二義とした意図に基づいた例といえよう。第Ⅱ例の場合に於ては把手そのものが，実用的意図を持たず，只装飾的意図を過分に表わしたものであり，これによって器形に美的印象を与えようと企てたものであり，第Ⅰ例とは全くその趣を異にした理念から案出されたものであろう。

形態創作の基礎的理念については多くの問題が提起されよう。換言すれば，この問題が古代人の意匠理念という問題でもある。これについて器物のもっている機能性の意味から見ると，人々の日常生活上の必須品—生活器具—の要求が一面，彼等の理想的な器形を充満せしめたものであり，日常の生活器具を意匠し，創作するための種々の実体（過去の器具）から暗示を受け，これを検討し，更にこれに新しい意慾を加えて創作したのではなかろうか。(偶然的な場合もあり得る)。従って，一個の器具を意匠するためには過去の伝統の上に立脚した構成理念が，その主要な要素となって生れてくる。しかも，それを使用して生活に有意義であることによって広く普遍的に使用され得るのである。即ち「意匠化」されるものといへる。この場合，これらの器具の表現している形態の美しさは一体どうなるのか，美を最初から彼等は意識していただろうか，恐らく，彼等は美を意識してはいなかったので

はなかろうか。生活に使用するという実際的な「用」の領域—機能的要素—がその主要な目的として生れたものであろう。即ち「機能は凡ての形態を生産せしめ，美は機能と共に生れる」といった原則に合致していたものではなかろうか。

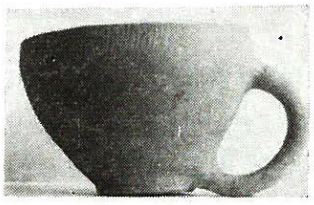
古代人の有していた造形的観念は純粋な美という理念に対しての憧憬は，彼等の要求した生活用具の生産といった契機の裡に埋没し，純粋芸術で得られた美の原理を工芸の分野に応用するのではなく，生活器具の使用目的，材料，構成といったものから自然に生れ出てくるものが美であったであろう。従って「機能は形態を決定する」「美は必然的に生れる」「実際的でないものは美であり得ない」という立場に立たざるを得ない。

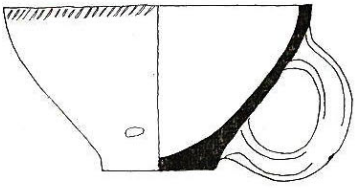
機能主義を主唱する人々から見れば，意匠又は造形化は芸術の領域から独自の地位を得ないようになった。換言すると意匠又は造形化ということは機能とは不可分離的な関係にあるものと考えられる。

古代人の遺物である以上の土器について，その創作又は意匠的な理念は明かに過去の人々のものから伝統的な意識の中に芽生え，時代性の特性と相呼応して発展したことが明かである。確立された意匠は既に新しい意匠を生みだす為の基礎と化し進展するものでなければならない。

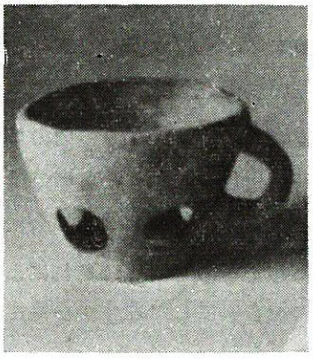
この様に考えてくると古代人の使用した土器と現代の吾々が使用しているものとの間に時間的には相当の距りを認めるが，器形に関しては極めて相接近したものを示していることに注目せずにいられない。

（本調査に際して資料を提供して下さった清原得巌氏，松岡樹氏，川村俊郎氏に深く感謝する。）

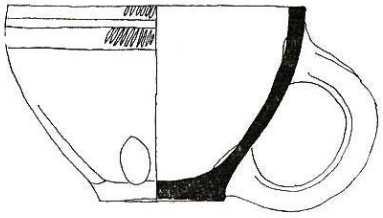


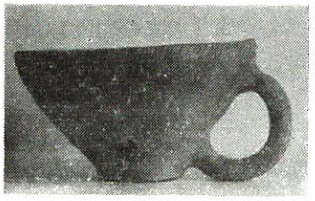


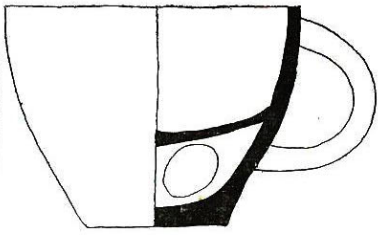
図Ⅰ　第Ⅰ例　A　　B



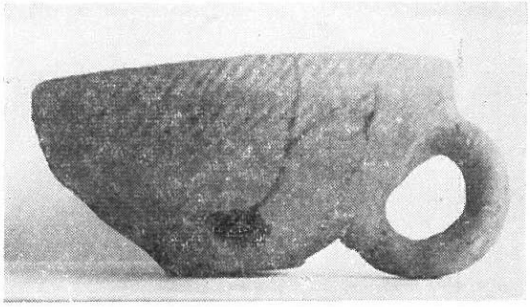
D





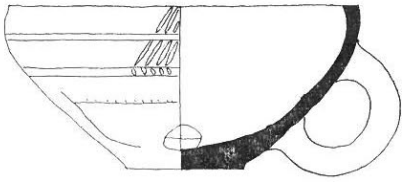


第Ⅰ例　A　　B　　D

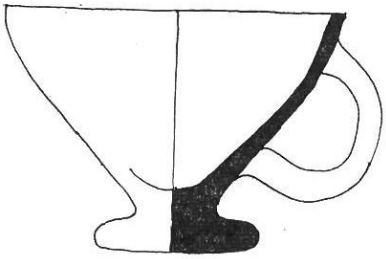


C

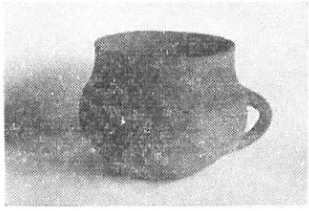
E



C

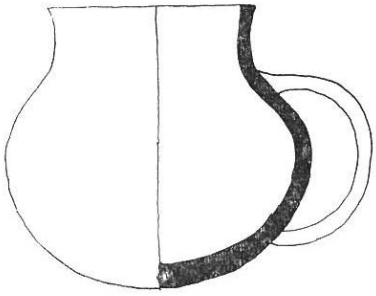


E

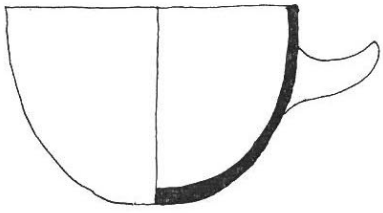


図Ⅱ　第Ⅱ例

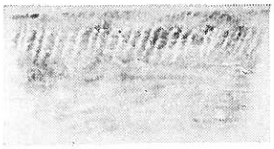
図Ⅲ　第Ⅲ例



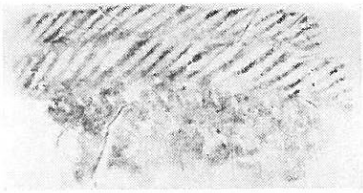
第 Ⅱ 例



第 Ⅲ 例



図Ⅲ　第Ⅰ例，装飾文様A



C